

經濟論叢

第 169 卷 第 2 号

-
- セルフヘルプの組織論(2) 田 尾 雅 夫 1
- 負債・持分の区分基準の意義と
限界に関する理論的検討 池 田 幸 典 21
- グリーン製品選択のジレンマ問題 在 間 敬 子 41
- マイクロソフト社の成長と「航空宇宙企業都市」
シアトルの構造変化(2) 山 縣 宏 之 56
- 花王におけるブランド管理
組織の展開(2) 安 賢 貞 72
- 《研究ノート》
- アダム・スミスの学問方法論をめぐって 田 中 秀 夫 91
-

平成14年 2 月

京都大學經濟學會

経済論叢（京都大学）第169巻第2号，2002年2月

《研究ノート》

アダム・スミスの学問方法論をめぐって

田 中 秀 夫

京都大学経済学会では、来日中のブリティッシュ・コロンビア大学名誉教授でカナダ学士院会員でもあり、アダム・スミス研究で著名なイアン・ロス教授を招いて、2000年10月14日（土曜）午前10時半から12時過ぎにかけて、京大会館（105号室）にて特別セミナーを開催した。

ロス教授（Ian Ross, Emeritus Professor of British Columbia）の予定された講演テーマは「アダム・スミス、ケイムズ卿、その他」というものであり、参考資料としてドラフト等（スミス、ケイムズ、マカロックについてのペーパーと著作目録）を配布した。教授の希望で、配布資料を一部参考にしながら、比較的自由に話して頂くことになった。

まず世話人（田中）から教授の経歴と著作（Main Publications: [1972] *Lord Kames and Scotland of His Day*, Oxford University Press. [1995] *The Life of Adam Smith*, Oxford University Press. 篠原久，只腰親和，松原慶子訳『アダム・スミス伝』シェブリンガー・フェアラーク東京株式会社，2000年）について簡単な紹介を行い、講義と質疑に移った。

ロス教授の講義は、スミスを中心としつつ、ケイムズにも言及するもので、予定の時間を大幅に超過して行なわれた。スミスの学問方法論を中心としつつ、関連する著作とトピック、思想家に触れながら行われた教授の熱心な講義は約70分続き、予定を超過して12時過ぎまで質疑応答が続けられた。以下、簡単に要旨を紹介する。教授の講演がスミスの学問方法論を中心にするものとなったのは、このセミナーに経済学と思想史の方法論に関心を寄せている方法論研究会の会員と日本イギリス哲学会の会員の参加が予想されたためである。

ロス教授講演「アダム・スミスの学問方法論をめぐって」

アダム・スミスの学問方法論は、主著の『道徳感情論』（TMS, 1759年）にも、『国富論』（WN, 1776年）にも貫かれている、ニュートンに示唆された観察・経験の方法であ

り、今日の講義ではスミスの方法論について主に取り上げたい。スミス研究は相変わらず活発であり、最近グリスウォルドの研究 (Charles L. Griswold, JR., *Adam Smith and the Virtues of Enlightenment*, Cambridge, 1999.) とフライシャーの研究 (S. Fleischacker, *A Third Concept of Liberty: Judgment and Freedom in Kant and Adam Smith*, Princeton U. P., 1999.) が出た。これらはともに現代の争点、トピックに関連をもった著作である。わたしの論じるテーマは、それとは直接の関連はない。スミスの方法論はTMSでもWNでもニュートン主義と言われるものであって、経験と観察に基づき、自然哲学におけるニュートンの万有引力の法則がそうであるような、道徳・社会哲学の原理の解明にさざげられている。スミスの学問体系は、周知のように、自然哲学 (『哲学論文集』の「天文学史」を含む)、倫理学、法学、経済学に分かれるが、スミスはそれぞれの部門において体系的な叙述を試みており、総合を目指した。スミスの道徳哲学の方法は、実践道徳的ニュートン主義 (practical moral Newtonianism) というべきものである。

「天文学史」は自然哲学に属すが、ラフィルによれば、スミスはニュートンの『自然哲学の数学的原理』を十分には読んでいないという。実際ニュートンは難解であって、スミス以上にニュートンを理解していたのはコリン・マクローリン (Colin Maclaurin) であった。しかし、スミスはニュートンをよく理解していたし、スミスの方法をニュートン主義と呼ぶことができるとわたしは考えている。

スミスの学問方法論には、もう一つの側面がある。それは市民社会の歴史をたずねて起源にまで遡る哲学的歴史の方法である。したがって、スミスは哲学的歴史の方法をどのように実践したかを問う必要がある。このように哲学的歴史と道徳的ニュートン主義の総合として、わたしはスミスの学問の方法を理解すべきだと考える。

市民社会の歴史という点でスミスが影響を受けたと思われるのは、スミスのカーコーディー時代の先生のデイヴィッド・ミラー (David Miller) である。ミラーは『エウトロピウスのローマ史要録』を残しているが、それはスミスも教わったものであって、ここでは歴史の回転 (革命)、帝国における文明の発展、封建制から市民社会へという歴史発展が扱われていた。

スミスはまたグラスゴウでフランシス・ハチスンと出会い、道徳的ニュートン主義を実践していたハチスンからそれを学んだ。ハチスはニュートンの方法を生物体に適用し、道徳哲学の方法とした。それは観察と実験を通して少数の人間本性の原理に到達し、そこから道徳・社会現象を理解しようとするものであった。ヒュームもスミスとともに

ハチスンの道徳的ニュートン主義から影響を受けた。グラスゴウ大学には自然哲学教授のロバート・ディック (Robert Dick) がいて、彼もまた引力の概念によって離れた物体の運動を説明する講義を行っていたから、スミスはディックから学んだ可能性がある。

さらに歴史の方面ではギリシャ語の教師であるアレグザンダー・ダンロップ (Alexander Dunlop) がいてスミスに影響を与えた。政治的發展については、D・ステュアートはモンテスキューの『ローマ盛衰原因論』(1732年) および『法の精神』(1748年) を話題にしているが、おそらくスミスもモンテスキューから刺激されたに相違ない。

マカロックはオックスフォード大学でスミスがヒュームの『人間本性論』(1739-1740年) を読んでいて謹責処分を受けたことを指摘している。当時のスミスは体調不良でパークリの「タール木」を試したりしていたが、そのことはスミスがパークリの哲学に関心をもっていた証拠である。後にスミスはヒュームの勧めで自分の相続人のデイヴィッド・ダグラスの家庭教師に数学者で自然哲学者のジョン・レズリー (John Leslie) を採用したが、このような関係は自然哲学への関心によるものであって、ヒュームの『人間本性論』の道徳的ニュートン主義がスミスの道徳的ニュートン主義に影響を与えたとも言えるであろう。

経験を通して一つまたはいくつかの原理を樹立し、その原理によって社会現象を説明しようとする道徳的ニュートン主義は、1748年から51年にかけて行なわれたスミスのエディンバラ講義 (現存しない) においてすでに見られたものと思われる。それは講義を原型としたと思われる『修辞学・文学講義ノート』を通して推定可能である。後援者の一人であったケイムズ卿もまた『道徳と自然宗教の原理』(1751年) においてニュートンの方法に関心を示していた。スミスは修辞学を論じて、「共感 (同感)」を原理とする説明を行っている。共感とは『道徳感情論』の一原理であることは言うまでもない。

哲学的歴史は、『道徳感情論』の付録として増補された「言語起源論」にすでに登場している。スミスは、文体を論じて、スウィフトの平明な文体を賞揚し、シャーフツベリの文彩を多用する比喻の多い文体を批判したが、それは難解を排する思想として哲学的歴史につながる。

哲学的歴史、すなわちD・ステュアートの言う「理論的、推測的歴史」は、スミスの市民社会史の方法であり、「言語の起源と進歩」の方法でもあったが、それは人類史に共通の自然的原因を発見し、異なる事物に共通の要素を析出するという思想に導かれている。スミスは古代の言語が未開人のジャーゴン (仲間言語) からいかにして生れたか、

また古代の総合的言語から近代の分析的言語がいかんして生み出されたかを推測的、哲学的歴史の方法にしたがって追究した。そのようなアプローチは立法者理解にも関連する。スミスは市民社会の歴史を分析して、行為者の「意図」が実現したか否かを問題にした。その結果、「意図せざる結果」という思想が成立した。

分析的言語というのは、複合言語とも言われ、英語のような言語であって、借用語が多いものである。総合的言語というのは、ギリシャ語や日本語のようにオリジナルな言語である。イングランドはデーン人の侵入によって英語にデーン語が混合したが、機械は単純な機械のほうが優れているのに対して、言語は単純にそうは言えない。調和という点ではギリシャ語が英語に勝っているように、とスミスは考えた。

この哲学的歴史の方法はモンテスキューの『ローマ盛衰原因論』と『法の精神』で採用されたものでもあるが、エマースンは聖書、ルクレティウス、ロックの「事象記述の平明な方法」、旅行記と歴史を結合しようとする近代の比較研究に関連があるとしている。哲学的歴史としては、ケイムズの『法史論集』(1758年)と『英国の古事』(1747年)、ミラーの哲学的歴史、すなわち『階級区分の起源』(1771年)と『英国統治史論』(1787年)、ヒュームの『宗教の自然史』(1757年)などをあげることができる。ラフィ爾は「推測的歴史」という用語は、安易な類推を想起させる点で必ずしも有益ではないと言う。

スミスはニュートンの体系とアリストテレスの体系を区別した。前者は第一原理からの演繹体系であり、後者はすべての現象に、それぞれ新しい原理をあてはめる体系である。スミスは前者を科学＝学問の方法として優れていると考えたのであるが、指導原理は自然哲学では引力の法則であり、経済学では分業である。エディンバラでのスミスの講義のうち、哲学史講義については、リードの後にグラスゴウ大学で道徳哲学を講じたアーサー (Archibald Arthur) の記述が参考になる。アーサーは「自然哲学の研究は、外的対象とそれらの予想を越えた変化によって引き起こされる驚きを取り除く手段」だと述べたが、それはスミスの『哲学論文集』に収録された「天文学史」の説明と似ている。スミスは哲学を自然の結合原理を解明する科学として考えたが、それはヒュームが懐疑的だった考え方である。スミスは人間の性癖は自然の結合原理を求めるという。自然の質の評価に人間の独創性はある。スミスは『修辞学・文学講義』において驚異や驚嘆を強調したが、そのような感情は想像力の構築物として、諸現象のより満足な理解を目指す科学に結実をみたとしている。

スミスはこのように科学の役割を体系化にみているが、体系を機械のアナロジーで理

解した。数学者は優雅な理論を求めるし、アインシュタインは想像力によって相対性理論に想到したが、スミスは哲学＝科学を想像上の機械とみなした。

スミスの第三部、市民法のコースに移ろう。エディンバラ講義の法学の内容については、十分な証拠があるわけではない。ウィリアム・ロバートソンは『カール5世史』(1769年)でローマ帝国没落後のヨーロッパの法体系、封建法等とともに市民社会史を展開したが、それはおそらくスミスが行ったエディンバラでの市民法の講義に示唆を得たものであった。スミスは市民社会が採集・狩猟、遊牧、農業、商業という諸段階を通過して進歩すると論じたが、それに照応する法の歴史を説いたところにスミスの獨創性があった。スミスの言葉を記したD・ステュアートによる断片には、スミスの思想的核とされるものが述べられている。すなわち、それは「一国家を最低の野蛮状態から最高の富裕に導くのに必要なのは、平和と軽い税と、最小の統治だけである」というものである。スミスは体系構築によって社会を改造するというような発想は退けたのである。

次に自然神学についてであるが、スミスの自然神学の草稿は見つかっていない。18世紀の自然神学が19世紀のダーウィンの進化思想の源泉となったことが、今日ではしばしば論じられるようになっているが、自然神学についてのスミスの見解を探るにはスミスの近辺の思想家の見解を見ることが参考になる。

ヒュームは自然神学に批判的であった。ヒュームの論敵ケイムズ卿の自然神学には「デザイン論」があり、それは慈悲深い創造神、至高の神が素晴らしい結果を生み出すように世界を造られたという思想である。それはウィリアム・ペイリーを通して、ダーウィンの進化思想に繋がった。ヒュームの懐疑的な『自然宗教の対話』に対してペイリーの『自然神学』(1802年)などの著作はケイムズを支持するものであった。そこには何ら独創的な思想はなく、ハチスン(精霊学)とおそらくスミスの自然神学の影響があったのではないと思われる。ペイリーは、自然神学はユークリッド幾何学と同じように喜ばしいと書いた。

ダーウィンは航海での発見のみならず、チャールズ・ライル(Charles Lyell)の『地質学の原理』(1830年)を読み、その影響を受けて、創造に関する啓示宗教から離れ、進化思想を抱懐するようになった。生物的進化と自然淘汰という思想には、マルサスの『人口論』の影響による生存競争という観念も影響を与えている。

ダーウィンの思想はメンデルの遺伝学と結合して新ダーウィン主義の成功を導いた。しかし、ケイムズが体現した道徳と科学と宗教を結合する自然宗教の構想には、今なお、顕る価値がある。例えば、ハーヴァード大学の生物学者であるE・O・ウィルソン

(Edward O. Wilson) は、人類が生存するためには、「コンシリエンス」(consilience—知識の統合の意)の可能性を求めなければならないとして、250年前にケイムズが目指した方向に努力すべきだと考えている。

以上のような要旨の講演の後、研究者と大学院生からなる参加者とロス教授との間で活発な討論が交わされた。主な論点は、スミスがモンテスキューを初めて知ったのはいつか。「意図せざる結果」という概念は、スミスが発明したのか、それともモンテスキューの君主政体論にその原型ないしルーツがあると考えてよいか。「天文学史」でスミスは「システム」という用語を中立的な意味で使い、TMS第6版では Man of System という言葉を否定的な意味で用いているのだが、スミスは「システム」という概念の語義理解を変えたのかどうか。スミスはニュートンの『自然哲学の数学的原理』を理解できたか。グラスゴウ大学の自然哲学教授ロバート・ディックの草稿は発見されているのか。コンディヤックのスミスへの影響はあったのか、等であった。